

# 「政治家として第一級の人物」

## 『サッチャー回顧録』上・下

牧草 泉

サッチャーは民主主義、自由主義経済を掲げて権力の座に着いた。「社会主義制度は国民を無気力にし、貧困をつくりだす元凶である」として労働党の福祉重視政策を厳しく批判、国民に「自助努力」を強く訴えた。国営企業の民営移管も自助努力への第一歩といつてよい。

サッチャーは対人関係を大切にされた。彼女の各国首脳に対する人物評は実に率直である。「自分の意見をはっきり言う人、約束を守る人」には全幅の信頼を置いた。

「民主主義の本質は忌憚のない意見を出し合い、討論することである」

という信念を持っていた。なかでもレーガン大統領との信頼関係は在任中変わることがなかった。中曽根元首相は、任期中、田中曾根内閣と酷評されたが、意外にもサッチャーの評価は高い。

サッチャーはエドモンド・バークを政治上の師と仰ぐ。英連邦首脳会議では、南アフリ

カに対する経済制裁の動議に対して、独り反対した。対中政策でも、「人権尊重を求めながら、交渉の窓口は開いておくべきだ」と言う。そこには、主権を尊重し漸進的に改革を勝ち取っていくという、バークの理念を読み取ることができる。

サッチャーは、EC統合に終始消極的だった。イギリスの主権が制限されることを恐れたのだ。彼女は言う「たとえ国連内であっても国の主権は尊重されるべきだ・・・。そうでなければ国際社会の正義と秩序を守ることはできない」と。主権の尊重はサッチャー政治の根幹をなすものであった。

サッチャーは民主主義国イギリスの首相であることを誇りとした。国民の支持のない専制政府は必ず崩壊すると確信していた。在任中にベルリンの壁は崩壊し、世界は新しい時代を迎えた。サッチャーの勝利であった。

しかし「盛者必衰の理」に例外はない。サッチャーは庶民税で躓くことになる。二十二章でサッチャー政権は終焉を迎える。章題は「救命ボートの男たち」。まさに言い得て妙である。この回顧録の圧巻といつてよい。支持者が次々とサッチャー丸から去っていくさまが克明に描写されている。それでもサッチャーは、自分の運命から目を反らすことはなかった。サッチャーは悲劇のヒロインでは決してない。それに反して去っていく男たちのなんと小さく見えることか。同性ながら「卓怯者」と叫びたくなる。

サッチャーは政治家として第一級の人物であった。

◎これは二十数年前に「週刊読書人」に掲載されたもの。

いつだったか、週刊読書人が文芸評論の懸賞募集をした。その賞金三十万円につられて

応募、少なくとも佳作には引つかかる、十五万円はいただけるという自信？ があり、万札をポケットに入れる夢を見て勇躍して応募。ところがあえなく落選。すると編集部から書評をお願いたいという依頼があった。これは、その時の原稿である。押入れを整理していたら、当時の週刊読書人が出てきた。確か札金は五千円ほどだったと思う。十五万円には程遠かったが、独り、にんまりした思い出がある。

極貧の出だと、「ただ（無料）」、「安い」、「半額」、「懸賞」、「賭け」これらの誘いには弱いのだ。たまには「ただより高いものはない」という場面に遭遇することもあるが、その時の悔しさは一過性のものであり、この性格は一生直らない。

場外馬券売り場に行くとかかる。数枚の馬券を買って、モニターをにらんでいる人々の姿を見ると、みんな親友に思えてくる。人に冷たくされたり、来るべき人からメールが来ないなど、人生の孤独を感じる時には、場外馬券売り場に行く。競馬開催日には朝十時から夜八時まで開いている。元氣印の受付のおばちゃんも優しい人だし、入室するのに抵抗はない。室内は清潔で机もあり、冷・暖房も完備。だから書き物をしたり、本を読んだりもできる。

そうそう、ここは無料である。身分証明書を提示すると、おばちゃんが会員証を作ってくれる。これを提示すれば、入室できる。さらに親切なガードマンもいて身の安全も保障されている。ここで、たつぷりと孤独を癒して、明日への生きる糧とするのである。

要するに場外馬券売り場は至れり尽くせりである。もちろん おばちゃんには悪いが、馬券は買わない。貧乏な上に、複数の病人を抱えている身としては、節約、節約の一語なのだ。

しかし、その代わりといつてはなんだが、宝くじは買うことがある。といつても時たま、数枚である。そう、「買わなきゃ当たらない」のだ。でも、その確率ときたら、巷の「物書き」が芥川賞を受賞する確率よりもはるかに小さいことが、ちよつと不満なのだが……。でも、「夢を買いました」である。月に一度は数枚の宝くじを露天売りのおばちゃんから購入する。考えてみると、若者は夢を追って荒野を目指しているのだが、年寄りも限りなくゼロに近い確率の宝くじを数枚握りしめて、人生のゴールへダッシュしていることになる。誰もがたどる道なのだとは知っていても、自分がその当事者になると、限りなく悲しい。